

大同取材記

A Note to Datong

番場 三雄

BAMBA Mitsuo

1986年、10月、中国北京空航に到着する。天壇、故宮博物館を取材、見学し、幾日か日に、列車にて大同市に到着、大同市郊外にある北魏佛、雲崗石窟を取材するためである。

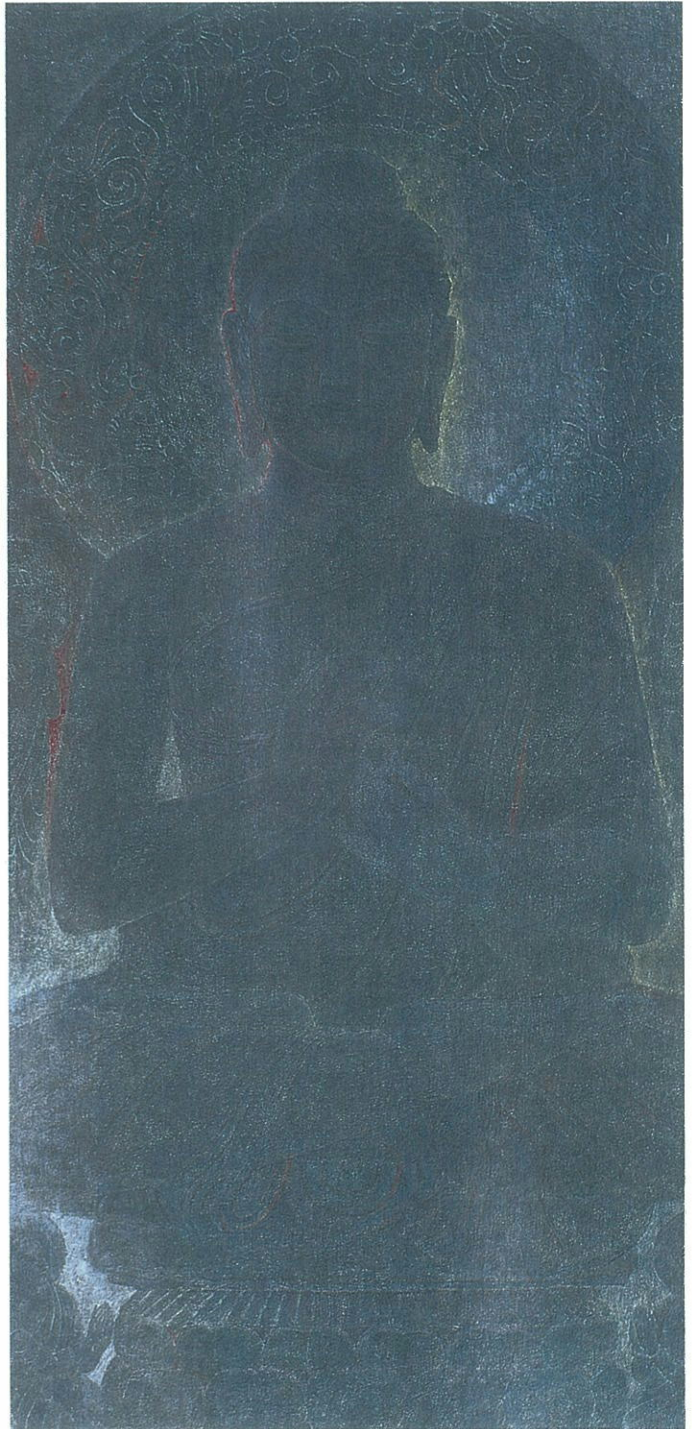
大同市は炭坑の街であり、街全体がドンヨリとしていた。バスにて取材に向かう途中、対岸を石炭を満載した蒸気機関車が走っていく。トラックで運ぶ人、馬車で運ぶ人、女、子供達は石炭を背負って街に運ぶ。そんな人々の生活を見ながら、数日間雲崗での取材をさせてもらった。5世紀頃より何世代にも渡り制作されたという石佛は、大小何千、何万体もあり、各々が慈悲の光を放っている。

取材途中何日か目で雨が降った。冷たい雨と風で観光する人達も少ない。第二十窟の正面でスケッチしていると、観光客相手に写真を撮るオバサンが、後ろからそっと傘をさしかけてくれる。また、近くで見ていた小学生位の男の子が2人いた。そのうち1人の子が片方の手袋をとり、私にさし出す。しばらくして、また1人の子が手袋を貸してくれる。両手が温かくなる。

目の前には美しい石佛、後ろにはやさしい人達、感謝と感動が複雑に入り交り、心の中で“ありがとう”と合掌を繰り返した。



サルナート想 In Remembrance of Sarnath 1994年 106×106 cm 紙本彩色



想 Buddhist Statve in Sarnath 1993年 150×75 cm 紙本彩色



春林 Spring Woods 1993年 91×72.8 cm 紙本彩色



月山 Mt. Gassan 1994年 60.6×50cm 紙本彩色